

令和2年度 大阪成蹊女子高等学校 学校評価

1 めざす学校像

- ① 本学園の建学の精神である「桃李不言下自成蹊」、「忠恕」の精神に基づき、「思いやりがあり、誠を尽くし人の立場にたって考え行動できる人材」、また社会に求められる「自立し、品格ある女性」を育成する学校（女子教育の推進）
- ② 女子に特化したキャリア教育を教育の柱として、女性として自主的に生きる力を育み、人間力を高めるために必要な資質や能力を育てる学校（キャリア教育の推進と人間力の育成）
- ③ グローバル社会に求められる多文化共生のマインドと必要な能力を育むとともに、確かな学力と「使える英語力」の向上を図る学校（国際教育・英語教育の推進）
- ④ 普通科の「キャリア進学コース」、「幼児教育コース」、「スポーツコース」、「キャリア特進コース」と美術科の「アート・イラスト・アニメーションコース」に加えて、今年度開設の「音楽コース」を合わせた特色ある6コースの教育内容を高め、生徒のニーズに応える生徒の夢を実現できる学校（多様なコースで夢を実現）
- ⑤ 共生の観点を基本として、他者を敬い、自己を肯定できる豊かな人権感覚を育むとともに、いじめのない安全で安心な学校（人権教育の推進、安全で安心な学校）

2 中期的目標

1. 学力の向上と学校教育力の強化

- ① コースの学びの充実とアクティブラーニングを取り入れた学力向上
・各コースの特性に応じた社会のニーズに応える新たな教育力の向上をめざす。また、日々の教科指導において「本時の目標と振り返り」に視点を置きながら、アクティブラーニングを取り入れ、生徒の学びの質的な向上に努める。また、指導法の改善により「わかる喜びが散りばめられた授業」の実践に努める。
- ② グローバルなキャリア教育の推進とユネスコ活動
・グローバル教育の観点を取り入れた「グローバルなキャリア教育」を推進する。コロナ禍ではあるが、これまでの取組みであった海外修学旅行や海外研修などを、オンラインを活用するなど様式を変えながらも継続的に学ぶ機会として設定していく。また、生徒のグローバルな活動としてユネスコスクール活動の更なる充実をめざす。
- ③ 使える英語教育の推進
・4技能を中心に、英語教育の充実を学園の教育方針と合わせて強化する。とりわけ、リスニング・スピーキングを重視する「使える英語」の育成を進める。
- ④ 各種検定の合格をめざす実学教育の充実
・3カ年の教育目標の達成に向けた各教科の取り組みを計画的に進め、生徒の達成感を育む漢字検定・GTEC(英語検定)・秘書検定等の合格率や到達度の成果を高める。
- ⑤ ICT機器の活用
・全教室に設置したモニター、ICT機器を活用した学習効果の高い授業を工夫する。コロナ禍でのオンライン学習にも取り組んでいく。

2. 円滑な学校運営と安全安心な学校づくり

- ① 募集広報活動の充実
中学生の大幅減少や私立高校の環境の変化に関わらず、常に生徒が集まる魅力的な学校をめざす。学校力の向上と募集広報活動の強化を両輪とした学校経営を推進する。
- ② 内部進学を増大と進路指導の充実
生徒の多様な進路選択を尊重しつつ、学園全体の発展を見据えて、併設大学・短大への内部進学者の確保に全力を挙げて取り組む。内部進学率60%を目標にする。
- ③ 生活指導の強化と自尊感情の醸成
重要な教育方針として、全教職員の共通理解のもと全教職員による生活指導(服装指導・頭髪指導等を含む)の徹底を図る。特に、生徒の自尊感情を醸成する「成蹊 pride」の趣旨を生徒・教職員で共有し、その確立をめざす。
- ④ いじめ防止と建学の精神を踏まえた教育の推進
本校の「学校いじめ防止基本方針」を踏まえ、本校でのいじめ対策について全教職員で共通理解を図り、いじめのない学校をめざす。また、建学の精神を踏まえ、人間力教育を推進する。
- ⑤ 評価育成制度によるPDCAサイクルの推進と、FD研修の充実
校長の進める学校経営に個々の教職員が主体的に参画する。評価育成制度によるPDCAサイクルを通して、個々の教職員の資質と学校力の向上を図る。特に、FD研修の充実により、教職員の能力・指導力の向上を図る。

【自己評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見】

学校評価アンケートの結果と分析

○生徒・保護者の学校評価アンケート結果 [令和2年12月実施分](抜粋)

・令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による2カ月超に及ぶ全校休校から始まり、これまで通りに実施できない取組みも多くなり、アンケート結果は例年に比べてやや低くなることは致し方ない状況ではあったが、各コース概ね良好な結果だったと言える。

【保護者の評価(肯定率)】

・「入学してよかった」という保護者の評価は、コロナ禍であっても87%を維持している(昨年度約90%)。また、学園内に併設大学・短大があるというメリットへの保護者の評価は、それ以上に高い。

・この学校には、他校にない良い特色があるという回答は、コロナ禍であっても昨年度とほぼ変わらない91%、伝統ある女子校として、また2学科6コースの総合タイプの私立女子高校としての評価は高い。

・生徒が学校を楽しく、充実していると感じているという回答は、コロナ禍であっても昨年度とほぼ変わらない87%であるが、学校行事が充実するとともに、活動に教育的な姿勢が感じられるという意見は85%から75%に、一方、「思わない」という意見は2%から3%となった。コロナ禍で学校行事そのものが実施できなかったことの影響は否めない。

・学びについては、補習や講習は総合的に整備されているという回答は、微増ではあるが80%から81%になり、「思わない」の回答は4%から3%に微減した。また、全科目にわたり、学習指導は充実しているという回答も71%から72%に微増、「思わない」の回答は5%から4%に微減であった学習指導の項目については、今後も課題として捉えながら取り組んでいく。

・学校はグローバル時代に対応する国際理解教育を進めているという回答は88%から77%に減少し、「思わない」の回答は2%から3%に微増した。コロナ禍の影響で海外修学旅行を含む海外での取組みができなかったことが主な要因ではあるが、ベルリッツや台湾やオーストラリアの高校とのオンライン研修等の取組みは評価されていると言える。

・「入学してよかった」というコース別の満足度を比べると、幼児教育コース・スポーツコース、そして美術科が最も高い91%、次に音楽コースが88%、その後キャリア進学コース、キャリア特進コースの順となっている。

・コース別保護者の評価を見ると、キャリア進学コースでは、「併設大学・短大があり、総合学園の長所が生かされている」「他校にない良い特色がある」が高い評価で85%を超えており、「授業は分かりやすくするための工夫をしている」「学校通信や文書で学校の様子がよく伝わる」という回答は、肯定的回答が昨年度より増加傾向にある。

- ・幼児教育コースでは、「併設大学・短大があり、総合学園の長所が生かされている」が95%、「他校にない良い特色がある」が94%と昨年度と同様に高い。本校幼児教育コースから併設短大の幼児教育学科、併設大学の教育学部への内部進学が優位性が高く評価されている。実際に幼児教育コースの85%の生徒が内部進学している。肯定的な回答が最も低い質問は、「ICTを活用した取り組みを行っている」という項目で60%であり、昨年度と同様、この対応に向けた検討が必要である。
- ・スポーツコースでは、全体的に保護者の回答には肯定的な傾向が強い。特に、「他校にない良い特色がある」は96%、「女子校として挨拶の励行、品格を育てる指導をしている」は89%となるなど、全ての項目で肯定的な意見が75%以上になっている。
- ・キャリア特進コースにおいても、「他校にはない良い特色がある」が95%であり、日常的にタブレットを使った学習や活動歴をICTで扱っているため、「ICTを活用した取り組み」は約80%の肯定率である。学習に関する項目の肯定率が飛躍的に向上することが課題と言える。
- ・音楽コースでは、「学校生活は楽しく、充実していると感じている」が98%、「他校にない良い特色がある」は96%など、今年度開設したコースでの満足度に高い評価を得ている。
- ・美術科では、「他校にない良い特色がある」が95%、「この学校に入学してよかった」が91%と高い評価である。府内の私立高校で唯一の専門学科として「美術科」を設置する本校の特色が保護者に理解されている。また、昨年度、肯定的な回答が低いものとして、「学校通信や文書で学校の様子がよく伝わる」が70%であったが、今年度は81%と向上した。

【生徒の評価(肯定率)】

- ・1年を通じてコロナ禍の影響を受け、例年通りの比較が難しい状況であった。
- ・生徒の高い評価は、「学校生活が充実している」が昨年度と変わらず87%、「所属しているコースに満足している」が87%と微増、「将来を考える機会が多い」も84%と微増している。
- ・一方、目立って低い評価項目は、「生徒会活動に積極的に参加している」が全体平均で44%であり、昨年度と同様に課題となっている。

○アンケート結果の分析

- ・生徒及び保護者とも、6コースの教育内容及び本校の特色をよく理解していただいております、学びの満足度も高い。コロナ禍であっても肯定率が増加する項目もある。学校の努力が一定の成果につながっていると判断できる。
- ・6年前から学校の特色としてキャリア教育と国際理解教育を柱とする「グローバルなキャリア教育」を推進してきたが、コロナ禍の状況を鑑み、工夫を重ねた企画のある取り組みにして、生徒・保護者の期待にこたえなければならない。
- ・「学校からの通信や文書などで、学校の様子を家庭に伝えること」の肯定率が81%と向上し、休校期間中を含め保護者と学校との連携がうまく行われていると言える。

学校評価委員会からの意見

▽令和2年度学校評議員（高木委員以外:今年度末までが任期）

| | | | |
|-------|-----------------------------------------|-------|-----------------------------------------|
| 高木 恒夫 | 公益社団法人日本教育会大阪府支部事務局次長 (元 高槻市立第四中学校長) | 徳丸 達也 | 元 大阪府立八尾翠翔高等学校長 |
| 小山 正辰 | 森ノ宮医療大学特任教授等 (元 大阪府立桜塚高等学校長) | 本田 勝士 | 公益財団法人大阪府スポーツ協会事務局長 (元 大阪府立貝塚南高等学校長) |
| 武島 辰男 | 元 大阪府立池田高等学校長 | | |

第1回 令和2年7月14日 会場 大阪成蹊女子高等学校 第2会議室 学校評議員4名出席(1名欠席) コロナ禍ではあったが、校長着任により対面での実施

【学校長から、令和元年度学校評価ならびに令和2年度の教育目標について説明】

① 委員からのQ: コロナ禍における学校運営や学力保障をどのように考えているか

A: 4月と5月の総括をするなら、コロナ禍で従来通りにいかないことが満載であったが、学校と生徒との繋がりを絶やさないように色々と工夫を重ねた。休校期間中においても保護者からの問合せがほぼ無いに等しい状況の評価したい。

学力保障については、学園の素早いバックアップもあり、オンライン学習に向けての基盤づくりが休校期間中にできたことが大きく、今後更なる活用に向けて検討を重ねていく。

② 委員の意見、提言

- ・学園全体で教学改革を進めているのが成功を収めた要因である。特に、大阪成蹊女子高等学校でも、学園と一体になって教育改革への施策、カリキュラムづくり、コース改編などを次から次へと打ち出しており、その姿勢がすばらしい。たいへん評価できる。それが原動力になって、大きく学園全体の発展に寄与していると思われる。
- ・高校と大学・短大が同じ敷地内にあることは、他にないメリットである。同じ敷地内でなければ組織全体の改革は、簡単にできなかったと思う。今後もそのメリットを生かすべき。
- ・校長の定める教育目標が明確で、教職員全体研修で周知する体制を引き継いでいくのがよい。大規模な100名を超える教職員集団が、研修等で方向や目標が定まることで、先が見えて自己の役割が明確になる。
- ・令和元年度の評価において、退学率が全体の2.4%と極めて低いことも評価に値する。
- ・今年度は特に中学3年生が大きく減少する中、入学者数の減少は、学校経営において継続的な改革を進めることが困難となるのではないかと。今後も継続的な改革を進めるにあたり、入学者数を確保する募集対策が必要となる。

第2回 令和3年3月 新型コロナ対策で、郵送による意見交換と助言指導

○学校評価アンケートの分析について

- ・昨年3月より全国の学校が対応に苦慮される中、大阪成蹊女子高校も生徒の心身、学力、学校生活への対応に工夫をされたことと思う。幼児教育、音楽、スポーツなど、コロナ禍の対策(マスク・密・接触)に配慮を強く求められる科目においても▲が少なく、◎や○の項目が多く占めたこと、ご努力に敬意を表す。
- ・コロナ禍にあつて、校長先生をはじめ教職員が一体となって生徒育成に努力されているからこそ、学校に対して高い評価があると思う。
- ・全体的にはよく頑張っていると言えるが、昨年度との比較での減少から課題を見出し、次年度に向け取り組みを構築することは大切である。
- ・各コースの課題を整理してみて、やはりどのコースも授業の工夫改善により「学ぶ意欲」を引き出すことは課題である。

○事業計画について

- ・大阪成蹊女子高校が数年前から取り組んできた「アクティブ・ラーニング」の推進に向けた研究をどのように継続していくのか、に関心を持っている。
- ・教員が進路に向けて、数的目標を明確に持つことが必要ではないか。
- ・女性の置かれている立場や情報化社会の中で戸惑い騙される怖さなどを知ることで、卒業後、女性として「学ぶ」意義や目的に気づき、「学び」に対する興味・関心・意欲に繋がるのではないかと考える。

○その他

- ・ホームページや電子パンフレットが工夫されていて、とても良い印象を受けた。

3 今年度の取組内容及び自己評価

| 目標 | 今年度の教育目標 | 具体的な取組計画・内容 | 評価指標 | 自己評価 |
|-------------------|-----------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 学習指導の充実と学力向上 | ① アクティブ・ラーニング(AL)を取り入れた学力向上すべての科目でALを導入 | 1.グループ活動での活用:グループ発表、討議等、探求活動などでALを適切な授業場面で実施する。 2.課題解決学習 :一方的な講義形態に終わらず、主体的に生徒同士が協力しながら課題・問題を解決する学習方法を積極的に取り入れる。 | AL実施授業数 | ・コロナ禍でグループワーク等の取組みが難しい状況となったが、課題解決学習を積極的に取り入れる姿勢は変えることなく、努めた。 |
| | ②コロナ禍であったも学びの充実 | 臨時休校や様々なコロナ禍での影響を受けると思うが、学びを止めることなく、オンラインを取り入れることも含め、「わかる喜びが散りばめられた授業」に向けて努める。 | 1. 学校評価アンケート「教え方に様々な工夫をしている先生が多い」の肯定率 2. 授業アンケート ①「授業に興味・関心を持つことができた」 ②「授業を受けて知識や技能が身についた」平均値3.0以上 | 1. 肯定率:74% / 評価平均:2.93 については、容認できる結果と言えるが、更なる向上をめざさなければならない。 2. ①平均 3.17 ②平均 3.18 次年度は更なる向上をめざし、③「授業内容について必要な予習・復習」ができていない」の平均値 3.00 が伸びる授業を展開させる。 |
| | ② 評価育成制度を通じた教科指導の充実と、公開授業の実施 | 1.評価育成での教科指導力の向上 日常的な教科指導の振り返りと授業点検を進め、生徒による授業アンケートや評価育成制度でのPDCAサイクルを活用しながら、教科指導力の向上をめざす。 2.公開授業の実施 全校休校もあり変則的な学校運営となるが、公開授業を実施する。 | 1.評価育成制度の実施状況 授業アンケートの活用の有無 | 1.全教員に評価育成制度を実施できた。 ・年度末の開示面談で個々の教員に対して、授業評価アンケート結果を基に指導を実施。 ・家庭学習に関する項目の平均値が一番低くなっている(3.00)現状を打破し、向上させることが課題。 2. コロナ禍に配慮し、校内のみでの公開授業週間となったが、実施することができた。 |
| | ③ 各種検定の合格をめざす実学教育の充実 | ・検定合格や資格取得に対応する教科の取組みを、コロナ禍ではあるが計画的に進める。 | 各種検定の合格率 | ・全員受験の漢字検定では、各生徒の目標級の合格率が大幅アップし、2年生は、入学時0であった3級保有率が46.2%になった。 ・全員受験の秘書検定では三級合格率は過去最高の63%(昨年40%)であった。 ・他のGTEC、世界遺産検定、家庭科検定等も対策に取組み、成果をあげた。 |
| 2 全教職員が一体となった学校運営 | ① 生徒募集力の強化とコースの特色の鮮明化 | 1.コロナ禍ではあるが、募集広報企画室の活動に対する全教職員の協力体制を強化し、オープンスクール(OS)は全教職員体制で臨む。 2.コース毎に生徒ニーズと学校教育方針を反映した特色づくりを更に強化する。 【普通科】 ア.総合キャリアコース 併設大学・短大の学部学科との接続を鮮明化し、特色を中学生に伝える広報を充実する。 イ.幼児教育コース コロナ禍で難しい実習等を何とか実施できるよう工夫する。併設大学短大の教育学部、幼児教育学科との接続強化を維持する。 ウ.スポーツコース 併設大学経営学部やびわこ成蹊スポーツ大学との密接な接続を維持し、スポーツ系の学びを充実させる。 エ.特進コース 生徒の自己研鑽力の育成を図り、自ら難関大学に進学できる学力伸長の取組みを強化する。 オ.音楽コース 2年次からの専攻実技を含め大阪音楽大学との連携内容を検討し確定するとともに、音楽に興味をもつ生徒を30名以上集める。 カ.看護医療進学コース(令和3年度開設) 新設コースでありながら、これまでも看護栄養レーンなどの取組みがあり、併設大学の看護学部創設との連携も伝えながら、40名以上を集める。 【美術科 アート・イラスト・アニメーションコース】 学内外の各種コンペでの上位入賞を今後も維持し、その成果を広く発信し、本学科の充実をアピールする。併設大学芸術学部への内部進学を更に強化する。 | 1.志願者数 2.各コース別志願者数と入学者数 | 1 コロナ禍で開催も危ぶまれたが、様々な工夫をすることで例年なみの回数 OS を開催することができた。 2.各コースの特色の鮮明化に努め、府内の中学3年生が3,000名以上減少する中、510名が入学した。また、新設の看護医療進学コースには、計画を大きく上回る生徒の志願と入学があった。 各学科・コース別の志願者・入学者 普通科 ア.総合キャリアコース 志願者 314名 入学者 152名 イ.幼児教育コース 志願者 154名 入学者 96名 ウ.スポーツコース 志願者 55名 入学者 35名 エ.特進コース 志願者 76名 入学者 34名 オ.音楽コース 志願者 54名 入学者 32名 カ.看護医療進学コース 志願者 92名 入学者 55名 美術科 アート・イラスト・アニメーションコース 志願者 203名 入学者 106名 合計 志願者 948名 入学者 510名であった。 (府内の私立女子高校で1番の入学者数) |

| | | | | |
|--------------------|---------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | ② 高大の教員間連携を強化し、内部進学拡大と進路指導を充実 | 1.内部進学率の拡大 併設大学・短大への内部進学者の拡大に向けて、3年生担任団と進路指導部との連携強化を更に進め、内部進学率60%の目標達成に向けて最大の努力を行う。 2.学園内高大連携の拡大 併設大学・短大との学園内高大連携を更に強化し、連携授業の充実に努める。連携授業100以上をめざす。 3.併設高校生対象オープンキャンパス(OC)の充実 併設高校2年生・3年生対象OCの充実に努める。 4.学習活動の継続 内部進学が内定後、進学後に必要な学力向上に向けた学習を継続させるための入学前教育を実践する。 | 1.内部進学率 2.学園内高大連携授業の実施数 3.併設校対象OCの状況 | 1.今年度の内部進学率は全体として54.9%、前年(52.2%)より2.7%増であり、過去最高となった。 内訳: 併設大阪成蹊大学114名、びわこ成蹊スポーツ大学9名、大阪成蹊短期大学134名 2.コロナ禍での全校休校期間や感染防止対策による中止などにより、連携授業がほぼ実施できない状況にあった。 3.コロナ禍でこれまで通りの取組みとはいかなかったが、OCを実施することができた。 4.入学前教育を併設大学・短期大学と連携して実施した。 |
| 3 生活指導の充実 | 建学の精神を踏まえた女子教育の充実と、学園のブランド力向上運動と連携した生徒指導の充実 | 1.女子教育の充実 建学の精神を踏まえた伝統ある本校の女子教育に必要な生活指導を徹底する。頭髪指導・服装指導など生活指導に関する教員向け指針を全教職員で共通理解し、全教職員による生活指導を徹底する。 2.学園のブランド力向上運動 学園の運動と連携して、日々の挨拶運動等を更に進める。生徒会への働きかけも強める。 3.正しいSNSの使い方 近年のスマホ普及に伴い、生徒のSNSの正しい利用に向けて生徒への指導力を強化する。教職員の研修を図り、ネット上でのトラブルを最小限に減らす取組みを推進する。 | 1.学校評議員の評価、生徒指導件数の変化 2.朝の挨拶運動の状況 3.スマホ関連の懲戒件数 | 1.学校評議員会で委員からの本校生徒についての評価は今年度も高い。まじめで、おとなしい生徒が大阪成蹊女子高校の生徒の特色となっていると評価された。 2.挨拶運動では、毎朝、生活指導部と担任を持たない教員が登校指導を実施し、一定の効果があつた。月毎の頭髪・服装指導も実施した。 3.入学時での生徒・保護者向けSNS研修をはじめとして、生徒や教員への研修も行った。 2,3年生にも改めてTVモニターを活用して講習を行った。 |
| 4 いじめ防止等の対策 | いじめ防止の取り組みと、建学の精神に沿った豊かな人権感覚の育成 | 1.いじめ防止対策 学校制定の「学校いじめ防止基本方針」を全教職員が十分に理解し、建学の精神を踏まえつつ、生徒が互いに他者を理解し、尊重し合える豊かな人権感覚をあらゆる教育活動の中で育む。 2.人権ホームルーム 「年間計画」に基づき生徒いじめアンケートを実施し、いじめ等の未然防止に努め、安全で安心な学校づくりをめざす。また、いじめに対応するガイドラインを遵守し、早期対応と管理職報告を密に行うなど、適切な対応を行う。 | 1.いじめ件数 2.ホームルームでの人権学習実施有無 | 1.今年度のいじめ件数はゼロ。 年2回実施している「いじめ防止アンケート」を踏まえた早期対応の成果である。 コロナ禍ならではの質問項目も追加してアンケートを実施した。 2.全学年で年2回の計画どおりに実施した。 事前の教員研修会も効果的である。 ※今年度の中退率 約1.6%(昨年度:約2.4%) |
| 5 生徒会活動・部活動の活性化 | 生徒の自主性を育むことをねらいとして、生徒会活動および部活動を活性化 | 1.生徒会活動の活性化 生徒会としての日常的な活動を積極的にアピールし、文化祭、体育祭、予餞会の各企画委員の活動支援体制の拡充を図る。学年を超えた生徒同士の交流を深め、人間関係を円滑に構築できる力を育てる。 2.部活動の活性化 新入生に運動部、文化部への加入を積極的に推奨し、部活動・同好会の加入率を高め、部活動の活性化を図る。 3.生徒の達成感を高める活動の推奨 運動部以外の文化系部活のコンテストや発表会等の成績発表を充実させ、ボランティア活動を含めて、積極的に生徒の達成感・成就感を育み、生徒の内面を鍛える取り組みを進める。 | 1.生徒会活動参加者数の増減 2.部活動加入率 3.コンテスト等の表彰歴、各種ボランティア活動状況 | ・すべての項目において、コロナ禍の影響は大きく、活動制限を受けたり、中止せざるを得ないものも多く、評価することが難しい1年であった。 ・文化祭と予餞会は制限をかけながらも実施することができた。中止にはなってしまったが既に決定していた体育祭企画委員3名の活躍の場も設定することができた。 ・部活動加入率も例年並みではあったが、活躍の場が激減したことが残念であった。 |

4 今後の改善方策

1 学習指導の更なる充実

新入生向けオンライン型自宅学習システムの LINES ドリルは、スタディサプリの導入に伴い、スタディサプりに付属した到達度テストに置き換える。本校での ICT 教育・遠隔授業の拡充に向けて、スタディサプリの有効活用を進めていく。

これまでの取組みで、アクティブラーニングの導入段階は一定目標を達成した。コロナ禍において制約を受けることを念頭に置きつつ、今後も更に研究を重ねて、生徒の自主的な学びの充実に向け、よりいっそう指導方法の改善を重ね、学習指導力の強化を図りたい。

2 グローバル教育・英語教育の更なる充実

これまで積み重ねてきた海外修学旅行等の行事は、コロナ禍が収束すれば新たに進めていく。併せて、オンラインの活用を模索しながら海外との連携を絶やさないよう取り組んでいく。

また、正式なユネスコスクールへの加盟により、SDGs の取組みを教育課程の中に一層発展させる必要がある。生徒と同年代の活動家や中学生などとの交流の場を設定していく。

1年生のベルリッツ英会話講習、2年次以降のネイティブスピーカーを使った英会話学習の充実に加え、2年生でのスタディサプリ・イングリッシュの導入を効果的に活用しながら、使える英語力を今後更に進める必要がある。

3 コースの完成年度に向けた検討と広報活動など

本校の最大の特徴である多様なコース配置と、特色あるコースでの教育活動を更に充実させ、中学生へのアピールを図る。完成年度まで検討を続け、音楽コースの生徒への学習保障を図り、大阪音楽大学との連携を円滑に進める。令和3年度に開設する看護医療進学コースについても同様で、本学のコース充実をめざす。

令和3年度も全教職員を対象とした募集対策の研修を強化し、学校としての募集力を高め、500名の生徒募集に向けて最善を尽くしたい。